

## ◆ 貧困問題をとおして見る、自分と世界のつながり ◆

氏名	曾根 典夫
学校名	茨城県立並木高等学校
実践教科	英語 I、道徳、LHR(ロングホーム ルーム)、家庭基礎 総合的な学習の時間
時間数	21時間(継続中)
対象学年	高校1年生
対象人数	201名(報告会、家庭基礎) 40名(その他の活動)

## カリキュラム

## ■ 実践の目的

私の勤務校の生徒は、「国際協力とはどういうことだと思うか」という質問に対して、「資金援助、募金活動、ボランティア、難民救済」等をあげ、各国が連携して先進諸国による開発途上国への支援活動をする다고考えている。生徒にとっての国際協力は「...のために何かする」である。これは、私が夏期にガーナ共和国を訪れ、そこで青年海外協力隊として活動する隊員の「困っている人たちのために何かをしたい」という思いと同じであることが分かった。そこで、私は今回の海外研修をとおして、以下のことを生徒と共に考え、実際に行動を起こすところまで実践していきたい。

- 「貧困問題」をとおして、自分の知らなかった国について、関心を持たせる。
- 世界の人々と自分との関わりについて考え、行動しようとする態度を育てる。

## ■ 実践の趣旨・根拠

高等学校学習指導要領第1章総則の「道徳教育」の目標や、第4章の「総合的な学習の時間」の第3を受けて、本実践では教科横断的に国際理解・国際教育をとおして「自分が世界とどのようにつながり、関わっていくのか」を考えてさらに実践していくことは、「自己の生き方を考える」ことにつながる。

## ■ 指導上の留意点

## (ア) 自分と同世代であること

生徒にとって、この活動が「見知らぬ国で起きている、自分たちとは関係のない話」とならないために、担任教師である私が研修先で見たことや感じたことを同世代の子どもや女性に焦点を絞って題材として取り上げ、興味を喚起した。

## (イ) 自分との関わりを意識させる

グループ学習を軸に「話す」活動を中心に据える。世界の国々がお互いに影響を与え合っていることを知り、貧困の原因が先進国との関わりから生じていることも一因であることに気づかせる。

## (ウ) 国を意識させすぎない

私が訪問した国は「ガーナ共和国」であるが、授業で「日本では～、ガーナでは～」というように一つの国をひとまとめにとらえると、その国への先入観を固定してしまう傾向がある。国を見るのではなく、その国で起きている事実を知り、そこに自分たちが間接的に関わっていることに気づかせる。

## (エ) 活動の場を学校の外(家庭)へ移す

「貧困」について話し合うだけの活動にしてしまうと、その後の行動が伴わない可能性があり、そこで学習内容が収束してしまう傾向がある。NGOの活動に参加したり、自分たちの活動を外部に新聞やインターネットをとおして発信すれば、学習の達成感も大きくなり、その活動内容を家族や友人とも共有できるであろう。

## ■ 授業の構成(指導計画)

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
<b>【1時限目】</b> <b>知っている国を地図に書こう</b> ねらい: 無意識に先進国や新興国を選んでいることに気づかせる	<ul style="list-style-type: none"> <li>世界地図に知っている国を書く</li> <li>「国際協力」のイメージを聞く</li> </ul>	世界地図 ワークシート
<b>【2時限目】</b> <b>児童労働に関するビデオ視聴</b> ねらい: 児童労働の実態を知る	<ul style="list-style-type: none"> <li>家庭科の授業の単元で児童労働の実態を知る</li> </ul>	ビデオ ワークシート
<b>【3時限目】</b> <b>帰国報告会</b> ねらい: ガーナで働く子どもと女性の様子を見ることで、現地の人々への興味を喚起する	<ul style="list-style-type: none"> <li>ガーナで働く人々の顔と実態を紹介する</li> </ul>	写真
<b>【4～8時限目】</b> <b>貧困とは何か、貧困の原因について考える</b> ねらい: ①「貧困」とは貧しいだけではなく、そこから派生する様々な状況があることに気づく ②貧困の背景には様々な原因があることに気づく ③構造的な不公平を実体験することにより、不公平な状況にいる人たちの気持ちを理解する④貧困の輪を個人で断ち切るのは難しいが、国際機関や日本政府が様々な活動でこの輪を断ち切ろうとしていることに気づく	<ul style="list-style-type: none"> <li>貧困についての派生図を作成させる</li> <li>貿易ゲーム</li> <li>貧困の輪を作り、その輪を断ち切らせる</li> </ul>	貿易ゲーム 模造紙 付箋紙 マジック ワークシート
<b>【9～11時限目】</b> <b>国際協力を考える1</b> <b>「STAND UP TAKE ACTION」(S.T.A.)</b> ねらい: 2009年10月16日貧困をなくすために立ち上がり、ギネス記録を更新する	<ul style="list-style-type: none"> <li>ワールドイベントに教室で取り組むことができることを示す</li> </ul>	映像 S.T.A.授業の手引き ワークシート
<b>【12～13時限目】</b> <b>メディアをとおして見る開発途上国を知る</b> ねらい: 新聞の切り抜きをとおして、開発途上国がどのように紙面に取り上げられているかを知り、お互いに意見交換をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>1時間をかけて、興味のある記事を取り上げ、感想を書かせる</li> </ul>	新聞1週間分 ワークシート
<b>【14～15時限目】</b> <b>国際協力を考える2「フェアトレード」</b> <b>児童労働の撤廃・予防に取り組むNGO紹介</b> ねらい: 世界には構造的な不公平があり、それを解決するための一つの方法としてフェアトレードという取り組みがあることを知る	<ul style="list-style-type: none"> <li>「しあわせへのチョコレート」プロジェクトについて示す</li> </ul>	写真 テントウ虫チョコレート(*1) ACE通信 ワークシート
<b>【16時限目】</b> <b>国際協力を考える3「作文」</b> ねらい: これまでの活動を振り返り、日常生活の中でできる国際協力を考える	<ul style="list-style-type: none"> <li>7月からの学習の流れを示し、これまで考えたことを振りかえらせる</li> </ul>	作文用紙
<b>【17時限目～21時限目】</b> <b>活動振り返り(同じアンケートを再びする)</b> ねらい: 最初にとったアンケート、毎回の感想を記したポートフォリオ、作文を読み返すことで、グループ内で今後の日常生活の中でできる国際協力を考え、壁新聞づくりをする	<ul style="list-style-type: none"> <li>JICA活動の紹介</li> <li>既知の教材を再度示すことで、これまで学習を振り返り、次の活動を考えさせる</li> </ul>	ポートフォリオ アンケート用紙 新聞記事(茨城新聞 11/11～17)壁新聞作り

\*1 「しあわせのチョコレートプロジェクト」特定非営利活動法人 ACE が取り組む労働や自然環境に配慮したオーガニックの「てんとう虫チョコ」の販売、募金活動、イベントを通じてガーナの子どもたちを支援しようというのもの。取り組み内容を ACE 通信で紹介。

### 授業実践の詳細

#### 【3時限目】帰国報告会(9/14)

##### 1-(1)ねらい

担任教師が JICA 主催の教師海外研修で見てきたガーナ共和国の現状を伝える。

##### 1-(2)内容

「働く子どもと女性」に焦点を絞り、“笑顔”でいるガーナの人々を紹介した。帰国後にインターネットや文献で調べた事実を合わせて、生徒に以下の事実を紹介した。ただこれらについては、現地の人々の証言はとることができていないため、間接的に分かったことである。



農村で働く女性



観光地で子守りをする子ども



漁村で働く子ども

- ・子どもは両親のため、自分の学費のため働く
- ・親の収入が低いため、子どもが“水売り”をしなければならない
- ・タクシー運転手と警官との違法駐車を取り締まりに関する混乱で、水売りの少年が被害にあって死亡(2008.6)
- ・田舎の子どもが漁港へ人身売買(Guardian.co.uk 2007.3.22)

##### 1-(3)生徒の感想・意見

- ・アフリカの方は貧困が続いているというのは知っていたが、実際の写真を見て改めて悲しくなった。しかし、アフリカの子ども達は笑っていた。これが普通だと思っているのなら、今の日本人の同じ歳の子の生活をアフリカの子どもが知ったら、どのように思うのか気になった。
- ・今回、このような授業を受けて自分の中で考え直す点がありました。今までの考えでは、「貧しい＝かわいそう」だったが、あっちにとってみたら、普通のことだったということ、ちゃんと笑いがあったということ、が分かった。自分もこのガーナを助けるために何かできることをしたいと思いました。

##### 1-(4)次への手立て

この訪問より、教師として自分ができる国際協力を以下のように考えた。開発途上国の人々のためにボランティアをしている人たちの活動とその気持ちを児童・生徒に伝え、開発途上国に住む人たちに興味を持たせたい。そして彼らの状況について学習をした生徒が一歩前に踏み出せるきっかけを作る場を提供するのが自分にとっての教員としての国際貢献であると考えている。今後の活動方針を以下のとおり生徒に伝えた。

- (ア) 知ること: 新聞を読む、HPで調べる、資料を読む、見る、NGO 訪問をする
  - (イ) 多くの人に知らせること: 家族や友達に話す、ポスターや壁新聞を作る、イベントに参加する
  - (ウ) 寄付: 文房具等の寄付、指定募金への協力
- 引用:「できるぞ! NGO活動 学校を作る 教育問題」石原尚子著(ほるぷ出版 2005)

**【4～8時限目】貧困とは何か、貧困の原因について考える**

2-(1)ねらい

4人1組のグループ学習として、以下の事柄について「気づき」を重視する。(ア)  
「貧困」とは貧しいと言うだけではなく、そこから派生する様々な状況があること。(イ)その後、貿易ゲームをとおして構造的な不公平を実体験することにより、不公平な状況にいる人たちの気持ちを理解する。(ウ)その結果をふまえ、自分が開発途上国に住む人という立場で「貧困の原因」を考える貧困の原因同士がつながっていて、悪循環を生み出していること。個人の努力だけでは、悪循環から抜け出すことが非常に難しいこと。

2-(2)内容

(ア) 貧困の原因を考える時間：貧困の派生図作成 等

4人1組の班を作り、模造紙の真ん中に「貧困」と書き入れ、貧困から想像される状況をつなげて考え、10分間でできるだけ大きな派生図を作る。各班でできた派生図を約1分間ずつ読んでから、隣の班に回し、他のグループの意見を共有する。その際、自分の班には無かった視点を探し、そこに付箋を貼る。話し合いをとおして、「貧困」とは貧しいと言うだけではなく、そこから派生する様々な状況があり、一つの困難はまた新しい困難を生み出す。そして様々な困難はつながっていて、その生活から抜け出すことは難しいことに気づくように指導する。



生徒の感想からは貧困問題を当事者ではなく、外側から見ている傾向がある。次回は貿易ゲームを導入することで、実際に開発途上国にいる人々の不公平感を实体験する必要があると考え、以下の(イ)につなげる。



(イ) 貿易ゲーム実践(9/30 2時間)

貿易ゲームとは、紙(資源)や道具(技術)を不平等に与えられた複数のグループ(国家)の間で、できるだけ多くの富を築くことを競う、貿易のシュミレーション・ゲームである。そのねらいは、同じルールの下でも、あらかじめ不平等な初期条件を設定しておくことで、豊かなグループはより豊かに、貧しいグループはより貧しくなるというように、経済格差が拡大していく仕組みを、現実の自由貿易システムと対比しつつ体験的、共感的に理解することである。授業では、A(先進国)、B(新興国)、C(開発途上国)の3種、7班に分けた。生徒は人数が多いところほど、お金が儲けられると思い、活発な生徒は人数の多いCに集まり、おとなしい生徒の班が少人数のA、Bグループになる傾向があった。



ある程度余裕のある新興国班



遊んでしまう開発途上国班

Aグループに自然に人が集まっていた。特にCグループからどっと押し寄せる。  
 C1: 売り上げゼロ。エビが結局売れず、売り上げゼロ。動機づけが高まらない。  
 C3: 「ハサミが無いとはじまんねー」「仕事しねー」「何して良いのかわかんない」「人が余っている」  
 あるグループはもはや崩壊状態。ABCの中で、Cが一番最初に崩れ出す。  
 「ちょっと貸して」と黙ってAグループのもちものを借りようとする人出現。お金がないため、他人の物を勝手に持ってきて、賄賂を贈ろうとする。  
 C4: バナナ3房。すべて形が合わずに買ってもらえず「あ～あ」「ハサミが無いと何もできない」  
 B1: もくもくと作業を進める。  
 B2: 一気に仕上げようと、段取りよくやろうとしたが、時間切れで未完成のものが多かった。戦略の失敗か。  
 A : 気の弱い男子3人が集まる。資源もお金もあるため、自分たちが使う分を残して他は格安の値段で貸してしまう。ただそれが返ってこないことがある。たまに自分が使う分さえも無くなることがあった。

↓

参加した生徒は、「貧困であるならば、働けばよいと単純に考えていたが、実はそうではないことに気づいた」という感想をほとんどの生徒が持ち、前向きに取り組んでいた。最後に、担任教師が教師海外研修で訪問したガーナで購入したチョコレートを与え、途上国の人々が生産したカカオ豆を先進国に住む自分たちが食べることでいつもと違う味を実感させた。

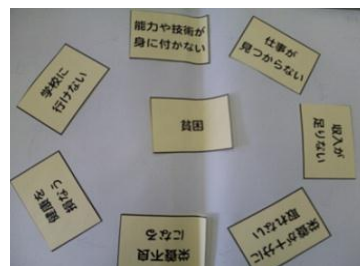


貿易ゲームで作った商品例

(ウ) 貧困の輪を作り、その輪を断ち切らせる

貧困の原因を考え、相互依存に気づかせることをあらかじめ1時間を使う。その後 10月5日に実施した内容である。4人1組の班を作り、模造紙の中央に「貧困」と書かれたカードを置き、そのカードを出発点に残りの7枚の貧困カード(「栄養不良になる」「能力や技術が身につかない」「収入が足りない」「栄養が十分にとれない」「学校に行けない」「仕事が見つからない」「健康を損なう」)がどのような順番でつながっていくのか因果関係を考えながら円形状に並べる。原因(状況)がつながり、悪循環になっていることに気づかせる。自分や家族だけで、その悪循環から抜け出すのは難しいことに気づかせる。悪循環からどうしても抜け出せないのか？ 抜け出す方法は他にないのか？を問いかけ、次のステップにつなげる。

例: 「お金がない」と「食べるものが買えない(飢餓)」の中で、「栄養失調」になる。→「栄養失調」になると「病気」になり、「学校にも通えず(学校・教育)」、字が読めなかったり、計算ができなかったり、生活や仕事に必要な「技術が身につかない」ため(基本的技能)、「仕事が見つからない」。→「仕事がない」と「収入が無く」なる。



貧困の輪の一例

2-(3) 生徒の感想・意見

(ア) 派生図

- ・最終的には、“死”や“生きている心地がしない”等とても暗いところに行き着いた。貧困から人の死までつながっていることも分かった。
- ・別の班の考えを見て、私たちが考えた言葉以外にもたくさんの言葉が書いてあり、納得した部分もあった。
- ・なぜアフリカ(有色人種)が貧困と言われているのか、なぜ北半球は貧困にならなかったのだろうと疑問に思った。

(イ) 貿易ゲーム : 資料③参照

(ウ) 貧困の原因を考え、相互依存に気づかせる

- ・今まで、日本などの先進国とフィリピンやインドなどの途上国とのつながりはあまりないと思っていた。しかし、現実とは違っていた。例えば、日本の食料自給率は低いが、多く

の食料輸入を途上国に頼っている。もし途上国の人々が働けなくなれば、日本の食料も無くなってしまう。ただの「依存」ではなく、「相互依存」しているということを初めて知った。

- ・日本はほとんど輸入に頼っていることが分かった。開発途上国の上に先進国が成り立っている・・・というか、自分たちは支えられているのだ。だから私たち先進国がもっと発展途上国を支えていかなければならないのだと思った。

#### (エ) 貧困の輪を作り、その輪を断ち切らせる

- ・「断ち切る」ということを考えるのは簡単だが、それを実際におこなうことになると政府が動いたり、民間だけではそう簡単に断ち切ることはできないと思いました。
- ・貧困の輪は簡単に作れるのに、貧困の輪を断ち切ることは難しいと思った。貧困の輪のどこを断ち切れれば一番良いのか少し迷ったし、断ち切る方法もあまりなくて、考えるのが大変だった。でも、もし断ち切る方法がすぐ分かっていたら、もう行動しているだろう。方法が見つからないというのが現状なのではないかと思った。
- ・貧困の輪を断ち切るためには、その困っている国だけで貧困から抜け出すことが難しいことが分かった。そのために、先進国からODAや青年海外協力隊などの支援があるのだと思った。このように世界が協力をしなければいけないほど、貧困という問題が深刻なものになっていると分かった。

#### 2-(4) 次への手立て

授業を終えて、生徒に書かせた感想を読むと、授業のまとめで担任教師が発する言葉が生徒の感想に所々に入ってきて、彼らに影響を与えていることが分かった。すこしずつ貧困問題についての意識はそれぞれが複雑に絡み合っていることを理解しつつあるようだ。自分達にできる手立ては、募金活動、という意見がよく見られる。確かに募金活動もあるが、それ以外の活動を体験させることで、考え方の範囲も広がるであろう。そこで JICA(国際協力機構)やその他の NGO 団体が開発途上国に対してどのような取り組みをしているのかを知らせ、高校生である自分たちに今何ができるのかを考えさせることで、「STAND UP TAKE ACTION」参加へのきっかけ作りとする。

### 【9～11時限目】国際協力を考える1 「STAND UP TAKE ACTION」(S.T.A.)

#### 3-(1) ねらい

生徒による「貧困」の定義をみると、3-2(B)に示すように第三者としての立場で考えてしまう。そこで、世界から「貧困」をなくすための教室から世界へ発信できる手段のひとつとして、「STAND UP TAKE ACTION」に取り組むことで、募金以外の国際協力を体験させる。



10月16日世界食糧デーの記事を読みあって、その後体育館で写真撮影

#### 3-(2) 内容

10/14: 準備 10/16: 実行 10/19: 反省

本時は 10/16 前回の感想配布: 他の方の感想を読むことで、前時の授業の総括

(ア)「世界食糧デー」「飢餓人口 10 億人突破」の記事を読ませる(10月16日読売新聞)

気になる箇所に下線を引かせ、その後、グループで意見交換

#### (イ) 貧困の定義を生徒と共有する

個人で考え、グループで意見交換、その後グループで一つ定義を決める。それぞれが漠然とした「貧困」のイメージを持つのではなく、クラス内で定義を確定させることで、これからの活動の際の土台を作るためである。

- 最低限の生活ができないこと(3/10 班中)
- 明日の食べ物への心配をしないといけないこと(5/10)
- 働きたくても働けない、雇いたくても雇えないという負の連鎖(1/10)
- 肉体的にも精神的にも限界近く、生きていくことすら難しい状態のこと(1/10)

(ウ) 飢餓が増えている理由と10月14日時点での生徒が考える理由を比較する

個人で考え、グループで意見交換、その後、グループで一つ定義を決める

- 気候変動や自然災害のため(3/10)
- 先進国の食料自給率が低いため、途上国の食料を奪っているため(5/10)
- 先進国は途上国に輸入を頼っているのに、輸入したものを余らせて捨ててしまい、無駄にしてしまう。途上国はもとの食料が少ないのに輸出するからもっと減ってしまい、栄養不良になってしまう(2/10)

(エ) 「世界食糧デー」「飢餓人口10億人突破」の新聞記事を読ませ、グループでまとめた飢餓の要因が新聞記事とどのようにリンクしているのかを知る

- 先進国による輸入依存
- バイオ燃料の生産量による食糧価格の高止まり
- 気候変動

\*10月16日は世界食糧デーでもあり、最初にその新聞記事を読ませ、気になる部分に下線を引かせた。その後、(B)(C)の活動をすることで、“貧困”、“飢餓”についての定義を各班で共有させた。再度(D)に取り掛かることで、これまで自分たちが学習してきたことと、実社会で起きていることとの関連を確認させた。

(オ) 自分たちにできることは何か？

ビデオ参照(2009 STAND UP TAKE ACTION)

再度、「私にとっての貧困とは何か」を振り返る

宣誓文を全員で読む

(カ) (オ)を確認したうえで、その気持ちを表すために紙を持って立ち上がる

体育館で写真撮影

3-(3) 生徒の感想・意見

- ・ 今日は今までのまとめとして、貧困の原因や飢餓の原因をもう一度確認した。自分が思っていた貧困とのイメージが変わったし、今まであまり気にしなかったけれど、これを期にいろんな場面で自分と貧困についての比較をしてみたりできると思った。豊かに生きている人たちが、立ち上がって何かをしないと、どうにもならないことが分かった。自分たちにできることをしていくしかないと思う。
- ・ 今まで「何かできることがあったら協力する」という口だけのことだったけど、実際にできることがあって、そしてやれて良かった。楽しみながら協力できて本当に良かった。これからは自分にできることは少しかもしれないけれど、小さなことでもやる。
- ・ 今日新聞を読んで、私たちが今まで考えていた“貧困の原因”と記事に書いてあることにつながりがあることに気づきました。今日授業でやったことをきっかけに、私も世界のためにできることを始めてみようと思います。
- ・ 飢餓の原因は自然災害や食料価格の高騰などによるものだと分かった。と同時に飢餓人口が10億人を突破してしまったということも知った。そこで今日、STAND UP TAKE ACTION というグローバルイベントにクラスで参加した。自分も国際協力の一員になれたことがすごくうれしかった。発展途上国のために何ができるのかと悩んでいたが、一歩踏み出した気がした。今はまだスタート地点。これからだと思う。今日のこの ACTION をとおして、自分ができることをもっと見いだしていきたい。
- ・ 今まで貧困について考えてきて、貧困は世界で協力しなければ解決しない問題だと分かったし、先進国と発展途上国のどちらかではなく、どちらも何か行動をしなくてはならないと分かった。今日 STAND UP に参加して、小さいことだけれど、貧困を解決するための活動に参加できて良かった。

3-(4) 次への手立て

「今日新聞を読んで、私たちが今まで考えていた“貧困の原因”と記事に書いてあることに

つながりがあることに気づきました。今日授業でやったことをきっかけに、私も世界のためにできることを始めてみようと思う」という生徒の感想にあるように、事後活動として、STAND UP TAKE ACTION の事後活動例を元に以下の活動を行うこととする。1-(4)に示した活動方針をより具体性があるために、以下のものに変更する。

- (ア)世界の貧困問題について友達や家族と話そう
  - (イ)フェアトレード製品を購入しよう
  - (ウ)NGO のボランティア活動、スタディツアーに参加しよう
  - (エ)新聞・雑誌・SNS などに貧困について投稿しよう
- 引用: 動く→動かす GCAP Japan (<http://standup2015.jp/index.html>)

(エ)については、当日新聞社の取材を受けており、10月21日付け茨城新聞に掲載され、NGO にも web で報告をしている。(資料①参照)  
次回は、上記の(ア)を受けて、開発途上国でどのようなことが起きているのかを新聞紙上で探し、それについての感想を書く指導につなげる。その後、(イ)、(ウ)へ発展させていく予定である。

### 【14～15時限目】国際協力を考える2 「フェアトレード」

#### 4-(1)ねらい

10月16日実施の STAND UP TAKE ACTION の事後活動として、以下の(ア)～(エ)がある。その中で NGO 団体の ACE\*1 で活躍する白木朋子氏の活動をとおして上記の(ア)(イ)に取り組む。その後、(ウ)につながるように、11月8日に JICA 筑波で開催される「国際理解教育ひろば」\*2 を紹介する。( \*1 児童労働の撤廃と予防に取り組む NGO \*2 青年海外協力隊茨城県 OV 会主催)

#### 4-(2)内容

(ア)新聞記事切り抜き(10月23日実施)で書いた生徒の感想を3種類取り上げ、「貧困問題」とのつながりを念頭に置いて、その記事をさらにグループで読み合う。貧困が引き起こしたもの、結果的に貧困を引き起こしたものという複眼的な視点を持たせるために、自分だけの意見とクラスメイトの意見を読み比べることで気づいたことを紹介しあう。



班毎の記事の読み合い

(イ)白木氏(ACE 事務局長)の取り組みを『JICA's World 2009. No.10 pp.20-21』をとおして知らせる。

その ACE の「しあわせへのチョコレート」プロジェクトについて触れ、児童労働撤廃・削減に教室から協力ができるように、フェアトレード製品の話をしながら、「てんとう虫チョコレート」を購入し、実際に食べるまで指導する。最後に帰国報告会(9月14日実施)で見せたスライドをもう一度見せる。

\*てんとう虫チョコレート購入資金は、6月に実施した文化祭で募金した1円玉、5円玉を充当する。

#### 4-(3)生徒の感想・意見

(ア)JICA'S World 白木さんの取り組み紹介(JICA's World 2009. No.10 pp.20-21)

- ・ クラスメイトが選んだ記事や感想を読んで、こんなことも貧困問題につながるんだなあと思いました。また白木さんの記事を読んで、ガーナの子供の労働環境について知識を増やすこともできたし、活動していることも分かった。「てんとう虫チョコレート」のどれだけが寄付されるのか、収益は何に使うのかが明確に示していて、実際に買って少しでも行動ができたのかなと思う。

(イ)フェアトレード製品を購入するまで「しあわせへのチョコレート」紹介

- ・ フェアトレードについて全然分からなかったが、今日の授業でなんとなく分かった気がする。「なんとなく」で終わらせたくないから、ちゃんと調べて理解しておきたい。



- ・自分たちの作った巨大壁画のお金が、実際に児童労働を無くすのに役立つとは思ってもみなくて驚いた。でも自分たちで行ったことが役に立つのは凄く嬉しい。早く児童労働がなくなって、安全な生活ができるようになって欲しい。
- ・貧しい国に援助したいと行動を起こそうと思うことは簡単だけど、実際に自分から大きな行動を起こしている白木さんがすごいと思いました。小さいことだけど、みんなで集めた1円玉の募金で「てんとう虫チョコ」を買って、行動を起こせることが嬉しい。



ACE のてんとう虫チョコレート

#### (ウ)2時間の活動を終えて

- ・前回と同じスライドを見たとき、前回よりもその内容が重いものを感じた。貧困について知って行くにつれて、その深刻さがさらに身にしみて感じられる。だから、これからもっと貧困について知っていこうと思った。
- ・改めてスライドを見て、初めて見たときと全然違う目で見ることができた。前見たときは、自分たちの生活と切りはなして見ていたけれど、勉強したことと関連させて見ることもできた。
- ・JICAの活動にすごく興味を持った。フェアトレードを知り、体験するために行った貿易ゲームの意味が本当の意味で分かった気がする。先生のスライドを以前見たときとは違う視点で見ることができた。
- ・私は今まで“貧困”についてこんなに考えたことはありませんでした。1時間ごとに“貧困”について興味がわいてきて、自分から新聞を読んだりするようになりました。私たちは少しでも困っている人たちのためにしてあげることができていると思います。もっとも世界で貧しい人たちのためにしてあげたいと思っています。
- ・今までの授業を通して、ただ漠然としか知らなかった貧困というものについて学び、実際に行動を起こし、貧困の中にいる人々に少しでも役立つという実感を持つとともに以前より少しではありますが、貧困についての理解も深まってきました。しかし理解を深めるだけで終わってしまえば、ここで学んできた意味がなくなってしまうので、また何かを起こしたり行動したいと思うのですが、思いつくのが募金ぐらいで具体的なものが浮かびません。まだ子供の私でも自分にできることは何かあるでしょうか？

#### 4-(4)次への手立て

この授業の後、11月8日に2人の生徒が、国際理解教育ひろば(テーマ「感じてみよう 働く子どもの気持ち」)に参加し、ACEの活動や児童労働の実態について学習してきた。感想は資料③参照。

上から目線はなく、目線をどれだけ下げて考えられるようになるかが課題である。

### 【16時限目】国際協力を考える3「作文」

#### 5-(1)ねらい

一度書いたものは自分の考えに気づく機会となる。エッセイを書くことが自分のこれからの人生の進路を探すきっかけとなることもある。自分の考えや感想を文字に表すことは、その瞬間で自分の思考の記録を写真に残すことと同じで、その文章を後から読むときに客観的に自分の成長の過程を知り、その自分を知った上で、次のステップへの成長につなげることをねらいとする。

#### 5-(2)内容

参考資料:「生きる幸せ」「知ることから」「伝えることから国際協力」

JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト 2008 入賞作品を読ませる。

#### 5-(3)生徒の作品

資料③参照。「第46回国際教育弁論大会(高校生のメッセージ)応募作品」

#### 5-(4)次への手立て

学年が終わる3月に自分の書いた作文を再度読ませ、意識がどのように変化したのかを感じさせる。

### 【17時限目～21時限目】活動振り返り

#### 6-(1)ねらい

これまでのまとめの活動として、教師海外研修の様子が掲載されている新聞記事を用いて、JICA の取り組み、ガーナ共和国はかつて奴隷貿易の中継地点としても知られていた場所であり、7 月にはオバマ大統領夫妻もガーナを訪問している。かつては奴隷として苦しむ人々がいたことについて概観し、その後、アンケートを実施して生徒の考えの変容を明らかにする。

#### 6-(2)内容

12/8 「ガーナ アフリカの希望 JICA の支援現場に行く1～7」(茨城新聞)  
12/9 フォトランゲージ:エルミナ城の写真を用いて奴隷貿易の実態に触れる  
12/14 アンケートの実施

#### 6-(3)生徒の感想・意見

##### フォトランゲージ

- ・ 写真を最初に見てストーリーを作っているときには本当のことを知らずに言いたい放題言っていたが、先生の話聞いて現状を知り、写真を再び見て考え直した。
- ・ 班のみんなで考えたストーリーは違った。先生の写真の説明を聞いて、すごく遠くに感じていた奴隷が近くに感じた。奴隷の人が最後に見た景色。実際に使われていた足かせや手かせ。どれも衝撃的だった。こういう問題は悲しいし、怖いけれど、目を背けてはいけないと思う。
- ・ 体育の授業で疲れた後の、衝撃的な内容は体力を余計に吸い取られる感じだった。
- ・ 知ると言うことは怖い。

#### 6-(4)次への手立て

開発途上国に関する新聞記事を切り抜いた経験を活かし、生徒の視点で学習したことを壁新聞にまとめる活動をする。グループ内で切り抜いた記事を持ち寄り、コメントを書き合うことで、それぞれのテーマに対して考えを深めることをねらいとする。

### 成果と課題

ここでは、実践の目的と指導上の留意点に上げたことを中心に本実践の成果と課題をみていく。7月から12月までの実践をとおして、生徒は以下のような変容を遂げた。

#### 7-(1)生徒の活動とメディア報告

- 10月16日 STAND UP TAKE ACTION 参加  
同日 ウェブサイトに活動報告し、掲載中
- 10月21日 「並木高校 貧困や飢餓 理解深める」茨城新聞に掲載される
- 11月2日 道徳教育授業公開
- 11月7日 学校公開日での授業公開  
しあわせのチョコレート(特別非営利活動法人ACEプログラム参加)
- 11月8日 国際理解教育ひろば  
(テーマ「感じてみよう 働く子どもの気持ち」2名参加)
- 11月17日 「ガーナ アフリカの希望 JICA の支援現場に行く7」(茨城新聞)  
にガーナ訪問の時の担任教師のコメントが掲載される
- 12月10日 第46回国際教育弁論大会(高校生のメッセージ)  
エッセイは40名が作成。うち、2名を上記大会へ応募
- 12月12日 JICA 筑波高校生国際協力実体験プログラム8名参加
- 12月18日 道徳教育実践セミナー分散会で実践発表(於:茨城県教育研修センター)

7-(2)実践の目的について

○ 「貧困問題」をとおして、自分の知らなかった国について、関心を持たせる。

Q: 貧困問題をとおして、自分の知らなかった国について興味を持つようになったか？  
はい 100% いいえ 0%

○ 「世界の人々と自分との関わりについて考え、行動しようとする態度を育てる。」

Q:世界の人々と自分とのかかわりについて考え、行動しようと思うようになったか？  
はい 100% いいえ 0%

3-(4)に示した活動方針の(ア)～(エ)については、ほぼ達成できた。

- (ア)世界の貧困問題について友達や家族と話そう  
(イ)フェアトレード製品を購入しよう  
(ウ)NGO のボランティア活動、スタディツアーに参加しよう  
(エ)新聞・雑誌・SNSなどに貧困について投稿しよう  
引用:動く→動かす GCAP Japan (<http://standup2015.jp/index.html>)

アンケートによると、これまでの授業の中で印象に残った授業には、国際協力を考える1・2で実施した「STAND UP TAKE ACTION」や「フェアトレード」が多かったが、その他「毎回やっていたプリントでの授業」、「写真から途上国について考える授業」、「新聞を切り抜いて、貧困のことを勉強した授業」、「相互依存を理解できた授業」という意見が多く出ていた。本実践において、有効だった手立ては、早い時期に「貿易ゲーム」を実践して、貧困の仕組みを体験して知ったことが動機付けを高めたものとする。それ以降、生徒が積極的に貧困が起こる原因を考えていくようになった。そして「活動振り返り」として12月に再度、帰国報告会のスライドを見せたときの生徒の表情が6-3の感想にあるように、9月とは大きく変化していた。

7-(3) 指導上の留意点について

指導上の留意点に上げた、(ア)～(エ)については以下のとおりである。

(ア)自分と同世代であること

Q:開発途上国の子ども(15歳未満)が働くことを認めるか？

7月		12月	
はい	50%	はい	48%
いいえ	50%	いいえ	52%

数字の上ではほとんど変化がないが、理由のところ、「親の収入や生活を考えると子どもも働かざるを得ない状況があるため、認めざるを得ない」という意見がでるようになった。

(イ)自分との関わりを意識させる

これは(エ)での結果にまとめられている。

(ウ)国を意識させすぎない

Q:「外国」と聞いて、思いつく国をあげてください。

7月当初はほとんどが欧米諸国をあげていたが、12月では、アフリカ諸国(ケニア、コートジボアール、ナイジェリア)、アジア諸国(ミャンマー、ラオス、アフガニスタン、カザフスタン)、中南米諸国など、授業で取り上げていない国までもが多く思いつくようになっていた。ちなみに「ガーナ」を思いついた生徒は、40人中19人だった。これは、ガーナと言う国を特定せずに、その国で起きている事実を目を向けさせた結果ではないかと肯定的に考えたい。

Q:「開発途上国」についてのあなたのイメージをあげてください。

7月の「～のために・・・する」という意見は残っているが、さらに「貧困」、「先進国への依存」、「負の連鎖」、「飢餓」等があげられている。これらはどれも授業で扱った内容

である。

#### (エ)活動の場を学校の外(家庭)へ移す

Q:あなたにとっての「国際協力」は何だと思いますか？

7月では国と国が協力し合って、「～のために・・・する」という抽象的なものが多かったが、12月には、「JICA や学校の授業で得た知識や開発途上国の現状を知って、それを伝える」「フェアトレード」「ボランティア活動への参加」、さらには「ご飯の食べ残しをしない」といった自分でできることをあげている。また保護者面談においては、「普段学校のことを話さない子が、授業でしたことを話すようになった」という意見を何人からもされた。これは、活動の場が学校から家庭へといつていることを裏付けるものである。

茨城県教育庁高校教育課指導主事によると、茨城県の「道徳」のねらいは、人間としての在り方生き方を考える時間としてとらえ、自分はどうすればよいのかを深く考えることだという。このことより、本実践は茨城県の「道徳」ねらいを十分に満たしたものであるといえる。

#### 7-(4)課題

本実践の授業時間の確保が当面の課題であったが、これまで21時間確保できた。そこには猛威を振るったインフルエンザによる学級閉鎖が起因している。幸い私の担当するホームルームは11月上旬に活動が一息ついたところで学級閉鎖になったため、その期間を利用して作文を書かせた経緯がある。今後実践を続ける場合には、総合的な学習の時間やロングホームルームをあらかじめ確保しておかなければならない。さらに、ティームティーチングをとおして一人でも多くの教員が国際理解教育に関心を示せるように啓蒙活動をし、情報を共有していく必要がある。高校生国際協力実体験プログラムに引率したのが、私の担当学年の地歴公民科の教員だったことも理解者が増えたことで嬉しく思う。

本実践はグループ学習を軸に、話し合いの時間を多く持ち、生徒の感想を活かしながら、次の授業の組み立てをしていった。その際、毎回前時の感想を私がまとめたものを復習として読ませた。生徒にとって他人の意見を聞くのは相当なインパクトがあることが分かった。今後も生徒には考える機会を与え続ける必要がある。帰国報告会と児童労働に関するビデオ視聴以外は、私の担当ホームルームの生徒を対象に実施した。生徒の活動を見やすくするためには、最大でも40人単位でなければ個人の活動を見渡すことができない。今後は、私の授業を受けた生徒がこれから3月までの3ヶ月間、考えをさらに纏め上げ、次年度のクラス編成後に、一人でも多くの生徒が新クラスにおいて「国際協力活動」についてリーダーシップが取れるように指導をしていく必要がある。その手立てとして、1月にはグループで決めたテーマを壁新聞に纏め上げ、学年全体の企画としては、JICA主催の国際協力出前講座を活用し、1月には日本人講師、2月には研修員による学校訪問をとおして、世界へ目を向ける素地を作っていこうと考えている。また6月には文化祭で国際協力のイベントが小さな企画でもできるようにしていくことで、

クラス → 学年全体 → 他学年 → 訪問者 → クラス生徒の家庭・クラス生徒の友人  
と言うように、「国際協力」の考え方が広がるのではないかと思う。

#### 終わりに

一つのテーマを約6ヶ月間扱ってきた。その中で大切にすることは「つながりを持たせる」ということである。それが、自分と自分の周りの世界であったり、内容や活動のつながりであったりする。一連の授業をとおして生徒は、自分対友人・家族という視点から世の中との関わりについても意識を向けられるようになったと確信する。

今後はJICA訪問、研修員の学校訪問、職員の学校訪問など、外部との関わりをさらに取り入れ、自分で活動できる人材を育成していきたいと考える。12月7日に実施した新聞社のNIEコーディネーターによる講演をもとに壁新聞の作製をとおして「知る」ことだけでは終わらせず、さらに高めるために、「伝える」ところへ指導していきたい。

この授業実践は以下の方々協力なしにはできなかった。JICA 筑波の甲田さん、宮本さん

## 資料2 実践報告書

は教師海外研修の統括をしていただいた。JICA ガーナの北原さん、飯島さん、同行の岩佐隊員、田川隊員、後藤隊員は現地での研修をコーディネートしてくださった。参加教員の宮本さん、渡邊さん、塩畑さん、記者の富岡さん、アドバイザーの山下さん、この方々のアドバイスなしには現地での交流も難しかった。授業実践では、私の意見を尊重してくださった並木高校第1学年スタッフ、並びに1年5組の生徒諸君に厚く感謝する。

参考文献

- 石原尚子「できるぞ！NGO活動 学校を作る 教育問題」(ほるぷ出版 2005)
- 岩瀬美江「平成 20 年度 教師海外研修(ラオス)報告書 pp129-136」(独立行政法人国際協力機構 筑波国際センター 2009)
- 岩附由香他「わたし 8 歳、カカオ畑で働きつづけて。—児童労働者とよばれる 2 億 1800 万人の子どもたち」(合同出版 2007)
- 開発教育・国際理解教育アクションプラン研究会「教室から地球へ—開発教育・国際理解教育 虎の巻 ~人が育ち、クラスが育ち、社会が育つ~」(国際協力機構中部国際センター 2006)
- 白木朋子「危険な労働から子どもたちを解放したい」(JICA's World 2009. No.10 pp.20-21)
- 曾根 典夫「働く子どもと女性」(平成 21 年度教師海外研修報告会レジュメ 2009)
- 曾野 綾子「貧困の光景」(新潮文庫 2007)
- 菅 正広「マイクロファイナンス」(中公新書 2009)
- ラッセルフリードマン「小さな労働者」(あすなろ書房 1996)
- 読売新聞「世界食糧デー“飢餓人口 10 億人突破”(10 月 16 日読売新聞朝刊)
- 茨城新聞「ガーナ アフリカの希望 JICA の支援現場を行」(平成 21 年 11 月 11 日~17 日)

資料

① STAND UP TAKE ACTION での活動報告

No.	グループ名	日付	場所	人数	イベント名	団体名	私のテイクアクション	写真(クリックすると拡大します)
270	ちーもぽんぽ	10/18	東京都	16	ハッピーロード withスタンアップ	ちーもぽんぽちゃん	まずは自分が動をモーターにフエードのこと、貧困がどれだけの家かの、自分たちの役割	
269	神奈川県立大和高等学校国際協力愛好会WAO	10/16	神奈川県	12	WAO	神奈川県立大和高等学校国際協力愛好会WAO1年生クラス部長	貧困をなくすためにできることをみんなで考えて実践していく。高松のみんがに呼びかけていく。	
268	神奈川県立大和高等学校国際協力愛好会WAO	10/16	神奈川県	7	WAO 国際協力愛好会	神奈川県立大和高等学校国際協力愛好会WAO1年生	10代の高校生が自分たちでできることを見つけていく。高松のみんがに呼びかけていく。	
267	茨城県立並木高等学校	10/16	茨城県	41	並木高から国際協力	茨城県立並木高等学校国際協力部	貧困問題について考え、自分たちでできることを実践すること。STAND UPすること。	

② 茨城新聞 10月21日 並木高「貧困や飢餓 理解深める」

**並木高 貧困や飢餓 理解深める**

【KIRAOと！】は難く読者のためのページです。情報や投稿をお待ちしています。住所、氏名、年齢、電話番号を明記。感想や質問も添えてください。〒310-0842 水戸市桜井町3丁目42-1 茨城新聞社学芸部「KIRAOと！」係 F.A.X 029(248)7754 Eメール: kirkao@mail2.star-ohi-yu.co.jp

「貧困や飢餓」をテーマに、新聞記者と連携して、生徒が考える「貧困や飢餓」の定義や原因を探究し、その解決策を模索する取り組みが、並木高等学校で行われている。生徒たちは、自分たちの力で、世界をより良くするために立ち上がり、世界を良くするために立ち上がる。意思決定のために生徒全員がジャンプをつくば市並木の並木高

新聞記者と連携して、生徒が考える「貧困や飢餓」の定義や原因を探究し、その解決策を模索する取り組みが、並木高等学校で行われている。生徒たちは、自分たちの力で、世界をより良くするために立ち上がり、世界を良くするために立ち上がる。意思決定のために生徒全員がジャンプをつくば市並木の並木高

③第46回国際教育弁論大会(高校生のメッセージ)応募作品

演題：貿易ゲームを通して

私たちはこれまでに、貧困問題を軸にして様々なことを考えたり、実践したりして学んできました。その中でも私が一番心に残っていることは、貧困の原因を考える「貿易ゲーム」を実践したことです。このゲームは、決められた人数でグループを作り、決められた材料を使い、決められたものだけを作ります。そしてその商品を売ることにより収入を得ます。以上のことだけを聞いていると、簡単に聞こえるかもしれませんが、しかし問題は山積みです。

まず、商品を作るために材料が足りないのです。その際には他のグループに頼み込み、足りていない材料を貸してもらいます。でも貸す側も無料で貸すわけではありません。「何分でいくら」という契約を結んで貸すのです。「ケチだなあ」と思う方もいるかもしれません。でも、どのグループ(国)も貧しいのです。実際に、強く契約を結ばなかったためか、貸した物が返ってこなかったというグループもありました。

次に、決められた人数でグループを作るといいましたが、全てのグループが同じ人数というわけではありません。七人、四人、三人というグループを作ります。「人数多い方が、たくさん労働力があるから儲かるのではないか」そう考える方も少なからずいると思います。でも実際は「人数が多すぎて働くことがない」「人数のわりに仕事が少ない」という状況に陥ります。その結果、「遊んでしまった」という意見が出ました。ここで分かることは“働きたくても働けない”ということです。「貧困と言われる国の人、働けばいいじゃないか」と思われる方がいると思います。でも仕事がないのです。働きたいという意思を持った人の数と仕事の数とは反比例ということです。

この貿易ゲームを通して、一番痛感したことは“働きたくても働けない”ということです。私は、この問題はどうすれば解決に近づけるのか考えました。そして日本や先進国が出来ることといえば、仕事を教えることだと思いました。青年海外協力隊の方々などは、途上国の方々に仕事に繋がることを教えています。そのことは続けるべきだと改めて思いました。そういったことを踏まえて、大切になってくるのは「フェアトレード」をすることだと思っています。公正な取引を目指して貿易しなければならぬと思います。そうしなければ、働いてもそれ相当の賃金が貰えず、「学校に行けない」「食べ物がない」「子供が働くしかない」といったマイナスなことしか起こりません。そうした悪循環が続いてしまうと思います。“どこか”で止めなければ、この負の連鎖は永遠に続いてしまいます。その“どこか”を真剣に考えるべきだと思います。

高校生が首を突っ込むべきでない問題があるのかもしれませんが、高校生の私はそう思います。

演題：知る、伝える

私は、ACEという児童労働の撤廃と予防に取り組むACEというNGOのワークショップに参加し、いろいろなことを感じ、いろいろなことを知った。

まず、この活動に参加しての率直な感想は、ワークショップ担当の白木さんに実際にお会いできたことがすごく嬉しかった。ACEで活動している方に直接会い、お話する機会なんて滅多にないことだと思う。とても貴重な経験をさせていただいたな、と思った。

そして、ワークショップのテーマは「感じてみよう 働く子どもの気持ち」だ。1枚の子どもの写真とその子について書かれた1枚の紙がグループごとに置かれ、そのグループごとにこどもは違っていた。その子のほしいもの、したいこと、してほしいこと、されたくないことをグループで考えた。私以外はみんな大人ばかりだったが、積極的に意見を言った。私の言うことでも、グループの方々には納得して聞き入れてくれた。私にとってそれはとても嬉しいことだった。私は、写真



の子の気持ちになって考えることができた。そして働く子どもたちの現状を知った。共通していたことは、学校に行っていないということ、働いている場所の環境・衛生状態が非常に悪いということなどがあつた。危険な場所で働かされ、その子どもたちの雇い主は厳しい人が多かつた。

親は何をしているのか。本来ならば、親が働き家計を支えていくはずなのに、子どもに働かせ、そのお金で生活している、という家族が多い。親が借金をつくって失踪したり、親が病気になってしまつたりして、子どもが働かざるを得ないというところもある。

子どもたちは皆、学校に行きたいだろう。自由に生きていきたいだろう。友達と遊びたいだろう。なにより、幸せになりたいだろう…。

私たちよりも幼いたくさんの子どもたちが働いている。この現状を知って何も思わない人はいないだろう。少なくとも私は、この現状をなんとかしたい、私にできることは何かないのだろうか、と思った。

高校生の私にできることは、まず、「知る」。インターネットや新聞でも、何か開発途上国に関する活動に積極的に参加することでも、どんなことでもいいから、知ろうという意思が大切だと思う。「知る」ことから始まるのだ。そして、そこで自分が初めて知つたこと、何か感じたりしたことを、友達や家族など身近な人たちに「伝える」。私ひとりが動いても、小さな力にしかない。しかし、伝えることによって、その人たちがなにかを感じて行動を起こしてくれるかもしれない。そのような人が増えていくことを私は望む。一人の人がやっていたことをより多くの人がやれば、その力は何倍にもなる。そうすれば、開発途上国の問題の解決へと繋がるだろう。

まずは、「知ろう」という意思から。そして「伝える」という行動を起こす。

それが、今、高校生である私たちにできることだと、私は思う。